

文部科学省 令和6年度

「大学等を通じたキャリア形成支援による幼児教育の「職」の魅力向上・発信事業

（「職」の魅力向上と人材確保の好循環を生み出すモデル創出事業）

「魅力がこだまする幼児教育・保育職 Echo モデルの開発」

事業成果報告書

2025年2月20日

東京学芸大学 幼児教育教室・附属幼稚園

目次

第1章 事業全体概要

第1項 課題背景

第2項 本事業の目的

第3項 事業の全体像

第2章 各取組の実施内容・成果

第1項 中学生の遊び体験授業

第2項 魅力的に働く保育の職場訪問とインタビュー

第3項 ホームカミング Day

第4項 プチ研修会と研修動画作成

第5項 パパ・ママ体験～大学生の子育て・家庭訪問～

第6項 オープンキャンパスでの「魅力を語る」企画・個別相談・園環境見学

第7項 イメージ動画・パンフレット作成

第3章 事業全体のまとめ

第1項 実施状況

第2項 事業全体の成果と今後の課題

第1章 事業全体概要

第1項 課題背景

(1) 子どもに触れる様々な体験保障と学びにつながる体験

少子化の影響もあり、小・中・高校、大学生において乳幼児と触れる機会は減っている。本学におけるこれまでの取り組みとして、附属学校を中心に、小中学生の幼児教育・保育体験や授業で幼児教育・保育について学ぶ取り組みを行ってきた。また、大学のオープンキャンパスでは、来校者が附属幼稚園を見学できる等、幼児教育・保育に触れる機会をつくってきた。幼児教育・保育職を志す者を増やすためには、中学生などの段階から乳幼児にかかわる体験や職場体験の取り組みが有効であるとされている一方で、通常の職場体験の場合は、幼児教育・保育に少なからず関心をもつ生徒が、その関心を職業につなげるといふ流れにとどまっている。ここに普段、乳幼児との関わりに関心がない生徒にも裾野を広げる課題が見出される。

本学では、令和5年度より、自律型カリキュラムデザインを一つの特徴とした新カリキュラムを開始している。これは、学生一人ひとりが目指す教師像（幼稚園教諭・保育士像）を設定し、その目標に向けた履修計画を立てていくというコンセプトに基づくものであり、授業以外の様々な教育・保育体験活動への参加を促し、その体験を単位として認定する仕組みである。学生には、教育・保育現場の実際に触れ、自分の強みや弱みを知り、目指す幼稚園教諭・保育士像や職の魅力に気づいたりしながら、学びを積み重ねていくことを期待している。

幼児教育コースでは、これまでも附属幼稚園と連携し、実習はもとより授業内での幼児とのかかわりや授業以外での環境整備、行事の手伝い、空きコマでのボランティアなどを積極的に推進してきた。新カリキュラムにおいても、様々な教育・保育体験の機会を保障するとともに、それらの体験が学生の学びやキャリア形成にどのように関連していくのか、検証しながら養成カリキュラムの構築をさらに進めていく必要がある。

(2) 学生の求めるキャリア支援

これまで、キャリア支援室が行う対策講座と幼児教育コースの担任制を活かして、学生一人ひとりのキャリア支援を進めてきた。例年、85%程度の学生が幼児教育・保育職に就いているが、就職活動においては、「もっとリアルな情報や本音が聞きたい」「様々な保育現場を実際に見たい」「自身のキャリアを長い目で捉えて考えたい」「そのためのロールモデルとなる人との出会いがほしい」などの学生からの声がある。授業でのゲストスピーカ

ーやホームカミング Day (研究室)、ボランティアやサークル活動で、卒業生を中心としたネットワークを活かし、取り組みを進めているものの、身近で信頼できる卒業生の声や様々な幼稚園教諭・保育士のライフイメージに直接触れる機会を定期的につくり出すには至っていない。それらを通して、学生のニーズに即したキャリア支援と幼児教育・保育職に対する希望や期待がより増えていくと考えられる。

(3) 卒業後のキャリア継続支援

本学、幼児教育コースの学生は、附属幼稚園で教育実習を行い、実習以外でも卒論で観察や調査に行くことも多く、附属幼稚園とのつながりが深い。少人数制のこともあり、附属教員も学生のことを把握しており、卒業後も附属幼稚園が開催する研究会に参加したり、附属幼稚園の教員に相談にきたりする学生もいる。また、昭和 61 年に創設された本学幼稚園科の同窓会 (たんぼぼ会) は、会員数 1000 人以上と国内有数の会員数を誇る。HP での情報発信や会報の発行、毎年 2 回開かれる総会や研修会では、世代や地域を超えて現職者同士の交流の場となっている。

このように、卒業後のキャリア継続支援は、同窓会の総会・研修会や研究室のホームカミング Day などを中心に行ってきたが、就業継続が難しくなり離職してしまう課題はある。特に、若手キャリアの学びを支える研究会や情報共有、悩み相談の場の提供が求められており、学生時代のつながりを活かし、幼稚園教諭・保育士となってからもサポートし続ける仕組みが必要である。また、現在の幼児教育・保育現場では、比較的少人数で組織する施設の特徴と日々の多忙さから、現職者が他者からのフィードバックを受ける機会が少なく、特に肯定的なフィードバックは少ないことが指摘されている。従って、大学教員や他園の幼稚園教諭・保育士、施設関係者以外の者が第三者的に関わる機会を通して、そのようなフィードバックを得られることが職業継続へのモチベーションにつながると考えられる。

(4) 幼児教育・保育職の魅力発信の課題

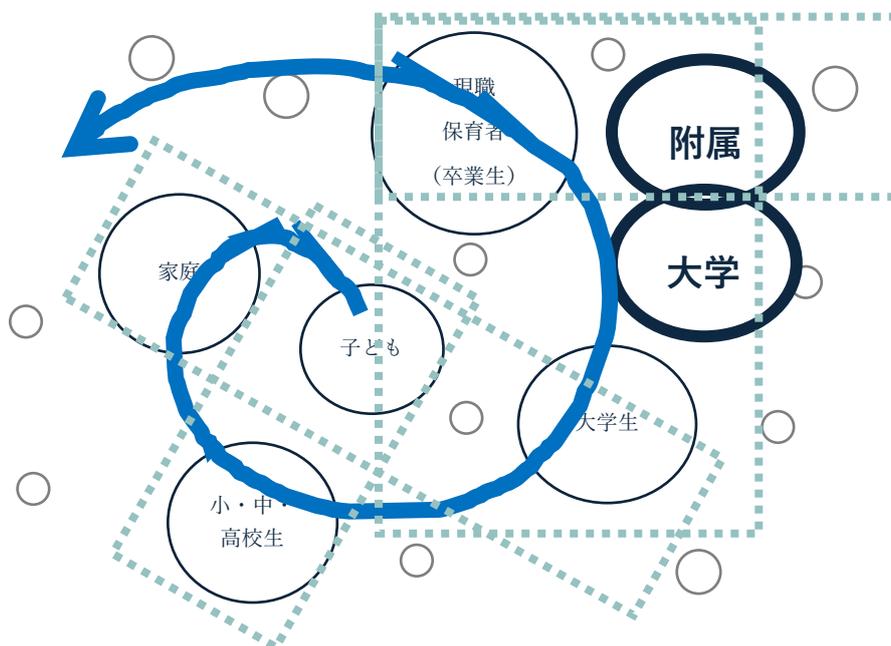
昨年度採択事業の成果と課題を拝見し、「報告会や懇談会を開催しても人数が集まらない」「web 上で情報を公開してもアクセス数が伸びない」などの課題があることを捉えた。その背景には、そもそも情報に気づいてもらえていないこと、当事者からの一方向的な魅力発信にとどまり、受け手の状態が考慮されていないことが考えられる。本事業では、それらを乗り越えていくために、次の 3 つの方策を立てる。(1)気づいてもらえるための印象的なデザイン、訴求的要素を盛り込む、(2)信頼できる人的ネットワークをベースに発信を広げていく、(3)作成に当事者 (現職者) だけではなく、保護者や学生、大学教員、他領域専門家など、様々な立場の者が関わり協働する。本事業では、パンフレットおよびイメー

ジ動画作成において、これらの方策を用いてより広く社会に発信する方法を提案する。

第2項 本事業の目的

本事業の目的は、幼児教育・保育職の魅力を一方向的に発信するだけではなく、現職者、養成学生、大学教員（附属学校教員含む）、子ども、保護者などの声を交換しながら、魅力がこだましていくようなモデルを創出することである。

【モデルイメージ】



各取組に複数の立場の者が参加することで、最終ゴール＝幼児教育・保育職人材確保への相補的・複層的な効果をめざす。

第3項 事業の全体像

本事業では、表1に示す6つの取組を行うと共に、幼児教育・保育職の魅力を発信するパンフレットやイメージ動画を作成し、発信した。

表1 本事業で行った取組

取組名	対象	目指したこと
中学生の遊び体験授業	中学生 × 子ども (×現職者)	幼児と関わる体験 子どもの魅力や面白さの発見
魅力的に働く保育の職場訪問とインタビュー	現職者 × 学生 × 子ども	働き方のリアル体験 ロールモデルとの出会い やりがいや喜びのフィードバック
ホームカミング Day	現職者 × 学生	大学生の具体的なキャリア支援 現職者のサード・プレイスづくり
プチ研修会と研修動画作成	現職者 × (学生)	若手キャリアのサポート 養成教育に含みきれないテーマ研修
パパママ体験(子育て家庭訪問)	家庭 × 学生 × 子ども	家庭での子育てへの新たな気づき 大学生の子育て体験/キャリアプラン
オープンキャンパスでの「魅力を語る」企画・個別相談・園環境見学	高校生 × (現職者)	高校生や地域に向けた幼児教育の発信 附属園をフィールドとした具体像の提供
パンフレット作成	大学×デザイナー×大学生×(現職者)	
イメージ動画作成	大学生×現職者	



パンフレット



You Tube チャンネルでの動画公開

第2章 各取組の実施内容・成果

第1項 中学生の遊び体験授業

(1) 取組内容

附属中学校家庭科の授業において、附属幼稚園教員による幼児教育の講義を行う。その後、中学生が幼児について考える機会（例；おもちゃづくり等）をもち、実際に園を訪問し、幼児と遊ぶ体験を行う。

(2) 対象

中学3年生（4クラス計139名）／ 幼児（計58名）

(3) 取組のポイント

・家庭科の単元「幼児の生活と家族」の学習が進み、子どもの発達などについて生徒が学んだ後、幼稚園教員がゲストティーチャーとして授業を行う。実際の幼児の姿を動画や写真で見せ、エピソードを交えながらわかりやすく話す。

・生徒が幼児を身近に感じられるよう、服のサイズや手の大きさなどを自分と比べられるような機会を設ける。小ささを感じると同時に自分の成長に気付く機会となる。



幼児教育に関する授業の様子



遊び体験授業で幼児と関わる様子

・園の環境のもと、実際に幼児とかかわる時間を設ける。幼児の遊びに自由に参加し、幼児の様子を見たり、幼児と会話をしたりして幼児の実態を知れるようにする。第1回目は自由にかかわり、第2回目は中学生が遊びを企画してかかわるようにし、段階を踏んで体験の積み重ねができるようにする。

(4) 実施体制

・附属中学校 家庭科教員1名（授業計画調整、授業・アンケートの実施）

・附属幼稚園教員 3 名（授業計画調整、授業の実施、交流受け入れ）

（5） 実施報告

・7月 ゲストティーチャーとして幼稚園教員が授業を行なった。

・9～10月 第1回遊び体験 附属幼稚園園児 2 クラス（計 58 名）と中学生が遊ぶ

・1～2月 第2回遊び体験 附属幼稚園園児 2 クラス（計 58 名）と中学生が遊ぶ

（6） 効果検証の手法

中学生への事前・事後アンケート（生徒 131 名回答・自由記述）

（7） 取組の成果

自由記述の結果は、①幼児のイメージ、②意外なこと、③幼少期を振り返る、④幼稚園の先生の仕事のイメージ、⑤今後の期待の5つに分類できた。各分類の回答率を図1に示した。幼児と一緒に遊ぶ前に授業を行ったことで、幼児へのイメージだけでなく幼稚園教諭の仕事についての気づきも見られた。また、回答者の56%(73名)に、「③自分の幼少期を振り返る」記述がみられた。記述には肯定的なことが多く書かれており、幼児や幼児教育職に対するプラスのイメージがうかがえた。

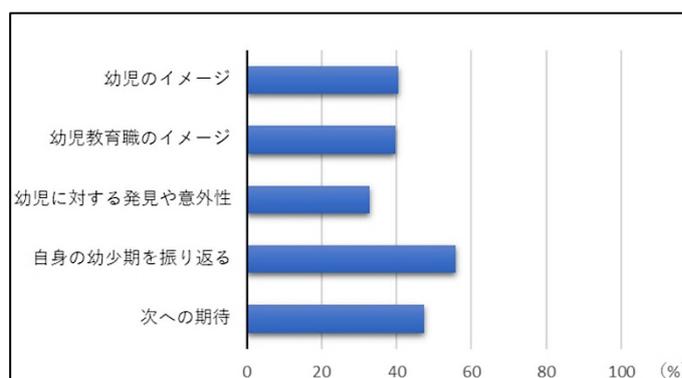


図1 幼児との遊び体験授業事後アンケート（対象者：中学生，回答数131）

（8） 取組の課題

職場体験とは異なり、授業実施としたことで、幼児との関わりに関心がない生徒にも、幼児や幼児教育職に対する興味・関心の芽生えが示され、裾野を広げることができた。一方、授業時数の規定により、幼稚園の生活時間と合わせての授業枠の確保が難しいという課題も明らかになった。さらに連携校を広げていくためにも、交流に関心のある生徒／幼児と、もちにくい生徒／幼児、どちらにも意味ある交流計画が必要となる。

第2項 魅力的に働く保育の職場訪問とインタビュー

(1) 取組内容

養成校生が幼稚園や保育所、認定こども園を訪問し、現場体験を経て、園の撮影や各園の現職者にキャリアや幼児教育・保育職に関するインタビューをする。撮影記録やインタビューをもとに、学生の目線で職の魅力伝える動画を作成し、発信する。

(2) 対象

大学生1年～4年生、教職大学院生 / 現職者

(3) 取組のポイント

・キャリアの多様性を大学生が体験できるように、異なる園の所在地・運営形態・インタビューを選定する。幼児教育・保育職への多様な見方を担保するため、インタビューには職歴の異なる2名を選んでいただくよう園長に依頼し、実施にあたってはグループ面接の形を採用する。

・動画やインタビューの発信における倫理面（説明・同意手続きや発信内容の確認）を丁寧に進める。

・インタビューの前に十分な見学の時間を設けるとともに、見学を通して気になったことや、案内の話を聞いて疑問に思ったことなどを学生同士で出し合い、インタビュー内容や順序を相談させることで、現場からの気づきに基づく学生の質問が生まれるよう、また体験の学びが深められるよう促す。

・高校生や大学生など若い年齢層により効果的に伝わる方法として、同世代の大学生が撮影・インタビュー・動画編集した幼児教育・保育職のPR動画を作成する。

(4) 実施体制

・大学教員2名：訪問引率、インタビューおよびコンテンツ制作の指導

・附属教員（各園訪問につき1～2名）：訪問引率、インタビューの指導

・訪問先の幼稚園・保育所・認定こども園5園：取材協力

・現職者（訪問先5園で計10名）：現場案内、インタビュー

(5) 実施報告

【職場訪問】（大学生等参加者は計17名／訪問先5園・現職者計10名）

- ・ 7月29日 静岡県磐田市立竜洋こども園
- ・ 8月21日 北海道北広島市 広島幼稚園
- ・ 9月24日 東京都西東京市 学校法人裕学園谷戸幼稚園
- ・ 11月5日 鹿児島県霧島市 ひより保育園（企業主導型保育園）
- ・ 11月7日 東京都江東区立豊洲幼稚園

【動画作成】

8月～1月にかけて、動画作成を行った。

（6） 効果検証の手法

- ・ 大学生参加者アンケート
- ・ インタビューに対する事後の聞き取り

（7） 取組の成果

参加学生アンケート（図2）において、「幼児教育職への期待が高まった」：とてもそう思う 33.3%、まあそう思う 66.7%（計 100%）、「子どもの魅力を感じた」：とてもそう思う 77.8%、まあそう思う 22.2%（計 100%）、「いろいろな実践があることが面白いと思った」：とてもそう思う 88.9%、まあそう思う 11.1%（計 100%）の3項目は評価が高い。つまり、職への理解や期待、子どもの魅力の実感、いろいろな実践の面白さを感じることには一定の成果があった。一方で、次の2項目、「自らのキャリア選択に影響があった」：あまりそう思わない 44.4%、「幼児教育職のイメージに変化があった」：全くそう思わない 11.1%、どちらでもない 33.3%、まあまあそう思う 55.6%となり、比較的効果が薄いといえる。ただし、自由記述には、「現場でできる活動は思った以上に幅広いなと感じた」「複数名の方の話を聞くことで、キャリア形成等に関しても見識を深められた」「インタビューを通して自分のキャリアを見直していくのでもよいのだと思った」との記述もある。

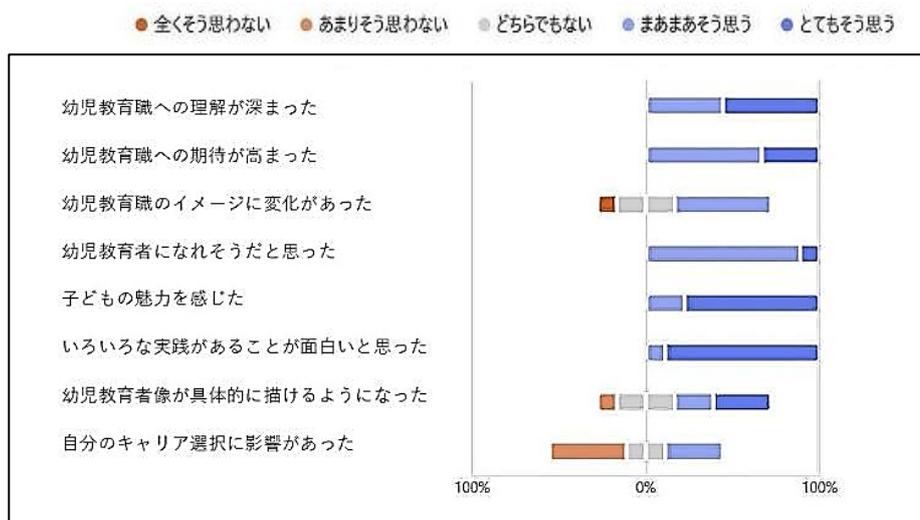


図2 職場訪問事後アンケート（対象者：幼児教育コース大学生，回答数10名）

今年度は、職場訪問への学生希望者が少ない場合もあった。「来年度もし同じ企画があったら参加してみたいか」の問いには、「職場訪問に参加したい」：40%であり、学生のニーズはあることが確認できた（図3）。職場訪問を含むどの取組にも参加しなかった学生に対するアンケートでは、「日程や都合が合わなかった」の回答率が53%となっていたことから、今年度の希望者が少なかった理由はスケジュール上の問題であると考えられる。

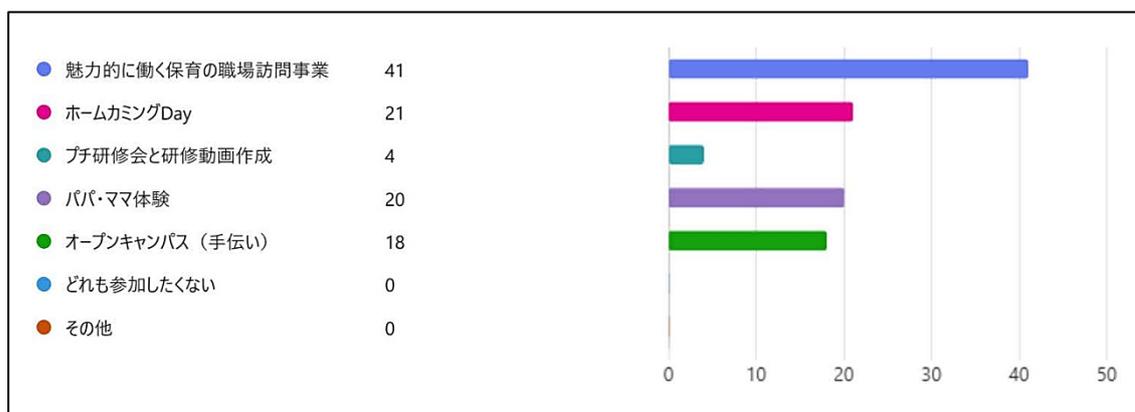


図3 本事業に対するアンケート（対象者：大学生，回答数104名）

高校生や大学生など若い年齢層により効果的に伝わる方法として、同世代の大学生が撮影・インタビュー・動画編集した幼児教育・保育職のPR動画を作成した。学生自身も訪問後にインタビュー文字起こしや動画作成に取り組むことで、振り返りを深めることができた。

現職者にとって、「自分の今を振り返る機会となった」「学生が作成した動画を見て率直に嬉しいし、さらなるやりがいや前向きな気持ちにつながる」との反響が寄せられた。大学教員や養成学生との交流・動画視聴を通して、肯定的なフィードバックを受け、自身のキャリアや職の魅力を確認できる機会となったと考えられる。



学生による幼児教育職の魅力動画（東京学芸大学 YouTube チャンネルに掲載）

（8） 取組の課題

現場体験することで、身近で信頼できるロールモデルを元に自身のキャリア形成に活かせるようにすることを目的としていたが、「自らのキャリア選択への影響」や「職イメージの変化」に対する効果は比較的薄かった。従って、①対象の選定見直し、②取組内容の焦点化により、検証する必要がある。①では、訪問する学生の学年を学部2～3年生に絞り込んで実施することで、自らのキャリア形成より効果的な体験が創出しやすくなると考えられる。②では、現在の幼児教育・保育の課題に対する考えや取り組み、やりがいなど、インタビューのテーマを事前に絞ることで、幼児教育・保育職のネガティブなイメージを転換する機会となる可能性が期待できる。しかしながら、キャリアやイメージは即効的につくられるものではないため、効果検証の手法や期間の検討も必要である。

日程調整と応募期間の前倒しにより、参加者のニーズを汲み取りより多くの学生が参加しやすくする工夫が求められる。また、取り組みを継続的に実施するためには、コスト（人的負担・金銭的負担）の面をふまえて、近隣で多様なキャリアをもつ現職者を探す必要がある。さらに、発信を想定して訪問するとなると、（個人情報観点などを含めて）信頼できる人的ネットワークをベースに対象者を探していく必要がある。

第3項 ホームカミング Day

(1) 取組内容

実習後の大学3年生が将来のキャリアについて本格的に考えるタイミングで、OBOGの現職者との交流会を開催する。身近で信頼できるロールモデルとの出会いを通して、自身のキャリア形成につながる機会とする。OBOGにとっては、大学とのつながりや年齢を超えたつながりを確認し、自身のキャリアや職の魅力を確認できる場となるよう開催する。

(2) 対象

大学3年生（大学1年から4年、教職大学院生も参加可能）

OBOG（幼児教育選修卒業生、卒業後5年程度経っている者に案内）

(3) 取組のポイント

- ・大学の教室にて、茶話会のような自由で温かい雰囲気のもと開催する。
- ・前半はOBOG登壇者の話題提供と質疑応答の時間とし、実習から現場に至る学びの連続性、キャリアステージによるチームや組織での役割などを共有する時間に設定する。3年生が質問しやすいよう投票式を採用し、引いた質問に答えていく形とする。
- ・後半は、OBOGの現職者と学生とで5・6名ずつのグループ（途中で移動も可）に分かれて、リアルな働き方や職のやりがい、悩み、やっておくとよいことなど、自由に語る時間に設定する。



登壇者とのQ&Aのやりとり



グループ懇談で和気あいあいと話す

(4) 実施体制

- ・大学教員3名：企画運営

・附属幼稚園教員 2 名：進行・コーディネーター

・大学生 22 名：受付・会場準備

(5) 実施報告

11 月 9 日（土）10:00 ～ 12:00 東京学芸大学 S101（S102 も使用）教室

・大学 3 年生 22 名、大学 4 年生 2 名、教職大学院生 3 名（記録係含む）

・登壇者 OBOG3 名、その他の OBOG 参加者 11 名

(6) 効果検証の手法

参加者事後アンケート

(7) 取組の成果

参加学生アンケート（図 4）において、「幼児教育職への理解が深まった」：とてもそう思う 28.6%、まあそう思う 71.4%（計 100%）、「幼児教育職への期待が高まった」：とてもそう思う 42.9%、まあそう思う 50.0%（計 92.9%）、「幼児教育者になれそうだと思う」：とてもそう思う 28.6%、まあそう思う 42.9%（計 71.5%）の 3 項目は比較的評価が高い。自由記述には、「キャリア選択での重視ポイントを学べた」「保育者の忙しさ、生活と仕事とのバランスを具体的にイメージすることができた」とあり、職への理解や期待の深まりから、キャリア選択が自分事となる大学 3 年生が働くことを具体的にイメージできたこと、仕事と生活とのバランスなど、学生が聞きたい情報に触れられたことで、幼児教育職への前向きな捉えへとつながったといえる。一方で、次の 2 項目、「自らのキャリア選択に影響があった」：全くそう思わない 14.3%、どちらでもない 28.6%、まあまあそう思う 35.7%、とてもそう思う 21.4%、「幼児教育職のイメージに変化があった」：全くそう思わない 14.3%、どちらでもない 35.7%、まあまあそう思う 35.7%、とてもそう思う 14.3% では、評価にばらつきが出た。自由記述では、「自分が本当になりたいのか考えるきっかけとなった」「どのような環境で働きたいのかを考えるきっかけになった」「1 人の人間としての生き方についても、視野が広がったように感じる」等があり、生き方や仕事観等にまでつなげて考える学生もいた。

現職者（OBOG）にとっては、「イベントへの期待は応えられましたか」との問いに対し「期待を上回った」85%、「期待どおりだった」15%（計 100%）となり、満足度の高い企画となった。最も良かった点に関する記述には、「卒業生だが、先輩の仕事やライフプランの話を聞いてよかった」「大学に行く機会がなく、企画がある行ってみようかなと思える」「自分にとっても情報交換の場になった」「こじんまりした会場で、同期や先輩後

輩、先生方と気兼ねなくお話できたこと」とあり、同じ大学という共通点から年齢や進路の異なる様々な者と交流できる場を求めており、その期待に応えられるものであったといえる。

大学教員にとっては、卒業生の近況や養成校からの学びの連続性、若手キャリアにおける葛藤状況や成長を確認できる機会となった。1回だけではなく、様々な企画者によるホームカミングの機会（時期・形式）の必要性を認識した。

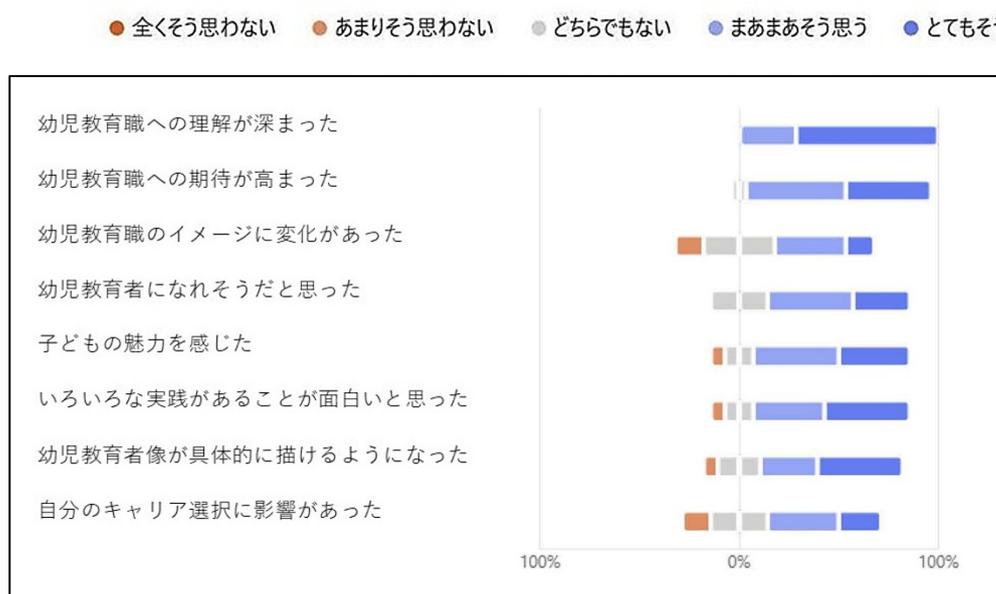


図4 ホームカミングデイ事後アンケート（対象者：学生，回答数14名）

（8） 取組の課題

今回は、登壇者3名のうち、公立幼稚園勤務者が2名だったため、次回以降は、登壇者の職場の選出に偏りのないようにする。大学生からも公立だけではなく、また幼稚園教諭だけでなく、私立や保育士の話も聞きたいとの声があった。また、学生がより主体的に企画運営できるよう少しずつ任せていきたいが、学生は、「学生の自主性や主体性の尊重」よりも、「教員のサポートの充実」を求めており（大学主催のイベントや活動への参加を検討するとき重要だと思う項目の順位が前者5位、後者6位）、両者のバランスとそれによる意識の変化を丁寧に追う必要がある。様々な企画者によるホームカミングの機会（時期・形式）があることが卒業生支援の選択肢となることから、同窓会組織、ゼミ、コース単位等、引き続き複層的に展開していく。

第4項 プチ研修会と研修動画作成

(1) 取組内容

新任・若手現職者が中堅者や附属幼稚園教諭と共に学ぶプチ研修会を附属幼稚園にて実施する。3つの研修テーマを設定し、日々の実践ですぐに使えるような製作や遊びのヒントなど保育の参考になる情報を交流できる場や小さな悩み等を相談できる場となるよう開催する。その後、現職者のニーズをもとにした短い研修動画（「実習指導」をテーマとする）の作成を行う。

(2) 対象

現職者（特に新任・若手現職者）

(3) 取組のポイント

・養成教育では触れることが少ないものの現場では必要となる知識や技能を含む3つのテーマ「ごっこ遊び」「実習指導」「保護者対応」を設定する。附属幼稚園教員が、各テーマについて10分程度、ポイントを伝えるプレゼンテーションを行う。

・その後、参加者が深めたいテーマを自分で選び、グループ討議に参加する。具体的な保育構想や手立ての参考になる情報交換や自分の悩みを相談し合う時間を設ける。その際、附属教員がアドバイザーとして各グループに入り、一緒に考えるようにする。



各テーマのポイントを共有する



テーマごとグループ討議で話す・聞く

・比較的休みがとりやすく通常業務に支障なく参加できる7～8月の夏休み期間に2回開催する。

・プチ研修会の様子とニーズ調査をもとに、「実習指導」をテーマとする短い研修動画を作成する。

(4) 実施体制

- ・大学教員 1 名：研修会告知、記録
- ・附属教員 4 名：研修会企画・運営、講演・アドバイザー

(5) 実施報告

【プチ研修会】

- ・8月1日、8月6日（台風接近のためオンライン開催に変更）
- ・参加者（計 22 名）幼稚園・認定こども園などに勤める現職者、教職大学院生

【研修動画作成】

12月～2月にかけて、動画作成を行った。

(6) 効果検証の手法

参加者アンケート

(7) 取組の成果

参加者アンケートでは 22 人中 21 人が「満足」と回答（95%）している。自由記述では「普段の研修では話題にならないテーマを聞いて良かった」「リアルな悩みを聞いて、自分だけじゃないと思った」「自分を肯定してもらえた気分」など参加したことで気持ちの前向きになる様子がうかがえた。特に教育実習について「自身が実習で学んで教員を目指した」「実習生の指導を手探りでやっている」「自分の経験しかなく指導が難しい」という声があり、「実習指導」についての動画を作成することとした。

(8) 取組の課題

プチ研修会の年間スケジュールを作成し、より早めに参加者を募る。附属教員も役割を分担して、負担のないようにする。内容は、今回のアンケートで得られた今後のテーマ（身体表現遊び、個人面談の進め方、遠足の行き方選び、後輩養成など）の希望に添うような内容を工夫する。今回、教職大学院生の参加は得られたものの、離職者の参加はなかった。研修会への参加は卒業生に関わらず、幅広く現職者が参加できるよう広報の仕方を再度検討していく。

研修動画は、効果検証まで至らなかったため、今後、公開動画のアクセス数や評価の検証と、作成した動画を活用した研修等で引き続き、検証を行う。

第5項 パパ・ママ体験～大学生の子育て・家庭訪問～

(1) 取組内容

教育・保育現場で働くことを志す学生が大学周辺の子育て家庭に2人1組で訪問し、子育てや家庭教育を見学、体験する。

(2) 対象

大学生 / 子育て家庭

(3) 取組のポイント

・学内の保育所や子育てラボ（学内教職員と企業のコラボコミュニティの一つ）とのネットワークを活かし、受け入れ家庭の募集及び学生の参加者募集を行う。家庭に入ることはリスクも伴うため、信頼関係に基づいたマッチングを行う必要がある。

・事前学習にて「幼児の遊びと玩具」「家庭教育・育児」「家庭訪問における注意点」に関する理解を深めてから訪問する。訪問時に、玩具や絵本などを購入し、訪問家庭へのお土産（謝礼）とする。この玩具や絵本をきっかけに子どもとの関わりが生まれやすくなると共に、学生が社会の中で子育て関連施設に訪れる機会となる。



家庭訪問で赤ちゃんに関わる



事前学習をしてから訪問に向かう

・「子育て TALK」と称する座談会では、家庭訪問の報告や振り返りを中心としつつ、大学生・家庭・大学教員・地域の方の参加を呼びかける。半屋外空間の環境と当日参加・途中参加自由の雰囲気のもと、多様な立場で子育てを語ることのできる機会として開催する。

(4) 実施体制

・子育てラボ（学内教職員と企業のコラボコミュニティ Explaygrand）：家庭訪問及びイベント（子育て TALK）企画・運営

- ・大学教員：事前学習講師・家庭訪問及びイベントのアドバイザー、学生への指導
- ・学内保育所：受入家庭募集・事前学習・イベント運営協力
- ・NPO 法人子育てアドバイザー協会：事前学習・イベント運営協力

(5) 実施報告

- ・6月上旬：学生への家庭訪問説明会・学生と家庭の参加者募集
- ・8月3日 参加大学生向け「幼児の遊びと玩具」「家庭教育・育児」「家庭訪問における注意点」に関する講義と事前学習の実施。
- ・8月：家庭訪問実施（5家庭に10名の学生が訪問）
- ・9月14日：家庭訪問振り返り（学生）とイベント打ち合わせ、チラシ配布
- ・9月28日：イベント（子育てTALK）開催。参加者：大学生（1年生7名、3年生3名）、子育て家庭（5家庭）、大学教員・子育て専門家（5名）、地域の高校教員（1名）、学外大学教員（1名）

(6) 効果検証の手法

参加者アンケート（自由記述式）：参加大学生、受入家庭保護者

(7) 取組の成果

学生参加者からは、「子育てはやはり大変そうだが、子どもの成長を保護者が見守る幸せな空間だと感じた」「保護者の方から子育てや仕事、家族の話を知ることができてより具体的なイメージをもつことができた」の記述があり、家庭教育や子育ての実際を理解し、人生を見通したキャリアプランのイメージに寄与したことがうかがえる。

受入家庭からは、「普段より家庭や保育園だけでなく、たくさんの人との関わりの中で育ててほしいと考えているため今回の機会は非常に貴重」との意見や「じっくり遊んでくれる学生さんとの時間を楽しんでいる我が子を見て自宅でも子どもが遊べる時間を確保したい」との記述があり、子育て家庭にとっても、我が子や子育てについて少し距離をおいて考えたり、見直したりする機会となっていた。

大学 Web サイトを介して広報したイベント「子育てTALK」には、事業関係者以外の参加者があり、近隣の高校教師（家庭科）の参加もあった。その後、この取り組みを高校生にも広げていくよう協力していく方向で進んでいる。

(8) 取組の課題

近隣の幼稚園や保育所とも連携し、受入家庭を増やしていく。大学生（高校生を含む）も幼児教育コースの学生以外への説明や募集の拡大が課題である。その際、信頼関係に基づいたマッチングを丁寧に行い、事前学習等も十分に行なっていく。また、大学生・受け入れ家庭ともに、複数回の訪問希望（リピーター）が出ているので、経験を重ねるパターンも視野に入れ、経験を重ねる学生とチャレンジしたい学生の両方を視野に入れた計画をしていく必要がある。子育て TALK のようなイベントは、関与者の枠を広げながら、ゆるやかにつながれる場として開催を検討していく。その際、SNS なども活用しながら、より広く、取り組みやイベントの周知をすることで、子育てに関心をもつ大学生、高校生の裾野を広げていく。

第6項 オープンキャンパスでの「魅力を語る」企画・個別相談・園環境見学

(1) 取組内容

大学教室にて、幼児教育コースの説明・幼児教育に関する大学生の学び・学生生活についての講義（幼児教育セッション）を行った後、附属幼稚園にて、園環境見学と附属教員による「幼稚園教諭の魅力を語る」企画を実施（4回講演）する。一日を通して、大学教員・附属教員・養成学生も交えて個別相談のブースを設け（中）高校生の相談に応じる。

(2) 対象

高校生（中学生）とその保護者

(3) 取組のポイント

・幼児教育セッションでは、大学生がどのように幼児教育を学んでいるのか、リアルな学びの様子を盛り込むとともに、学生からプレゼンする時間も設けて、大学生生活の想像がつくよう工夫する。

・キャンパス内に附属幼稚園があるものの5～10分程度の移動が伴うため（例年開催時期は猛暑でもあるため）、大学教室内での幼児教育セッションの後、学生スタッフが附属幼稚園へと誘導し、附属幼稚園にも足を運んでもらえるように促す。

・「魅力を語る」企画では、15分程度のコンパクトな話に話題を整理し、高校生（中学生）にもわかりやすく、幼稚園教諭の魅力が伝わるよう工夫をする。



魅力を語る会の様子

・個別相談ブースを大学教室、附属幼稚園に設け、大学生を配置することで、来場者が相談したいタイミング（混雑回避もあり）で相談できるようにする。

・園環境見学では、実際に遊具に触れたり、遊んだりできるコーナー、子どもたちの様子を伝えるパネル展示など、幼児教育の魅力や職への期待を実感できるようにする。

(4) 実施体制

- ・附属幼稚園教員（語る企画・環境見学誘導・個別相談対応）15名
- ・大学教員（コース全体会運営・学生監督）3名
- ・大学生スタッフ（学生誘導・個別相談対応）12名
- ・教職大学院生スタッフ（学生誘導・個別相談対応・記録）5名

(5) 実施報告

7月27日（土）9:30～16:00

幼児教育セッション全体の参加者：中高生・保護者 400名

附属幼稚園「語る企画」参加者：中高生 127名、保護者 名

(6) 効果検証の手法

来場者アンケート（高校生 107名、保護者 26名）と養成学生への聞き取り

(7) 取組の成果

来場者アンケートから、全体の満足度は高いことが示された。また、高校生の満足度評価と保護者の満足度評価は概ね同じ傾向を示している。幼児教育セッション満足度（高校生）図5：満足82%、やや満足18%（計100%）、幼児教育セッション満足度（保護者）図6：満足82%、やや満足18%（計100%）、「分かりやすく楽しそうに思った」「モチベーションが高まりました」などの自由記述より、具体的な学びや充実した養成学生の姿から、幼児教育職や幼児教育を学ぶことへの肯定的なイメージを受け取っていた。



図5 幼児教育セッション満足度（高校生 107名）



図6 幼児教育セッション満足度（保護者 26名）

園環境見学満足度（高校生）図7：満足95%、やや満足5%（計100%）、園環境見学満足度（保護者）図8：満足82%、やや満足14%（計96%）であった。「魅力を語る」企画満足度（高校生）図9：満足96%、やや満足4%（計100%）、魅力を語る」企画満足度（保護者）図10：満足89%、やや満足11%（計100%）であり、特に今回特別企画とし

て行なった「魅力を語る」企画は好評であった。「話がわかりやすい・面白い」「幼児教育職の魅力（やりがいと楽しさ）を十分に感じた」「実際の先生の話を受けることの貴重さ」「やっぱり幼児教育職に就きたい思いが強くなった」などの自由記述にあるように、魅力を語る企画や個別相談など、直接的な対話や実際の園環境に触れる機会が魅力を感じる部分に影響したと考えられる。これらの直接的な影響かどうかは不明であるが、令和8年度（7年度実施）本コース受験志願者数（前期試験）では、倍率（3.1倍、前年度2.5）が微増となり、幼児教育職を目指す者の増加につながった。

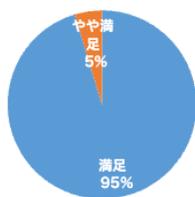


図7 園環境見学満足度（高校生 107名）

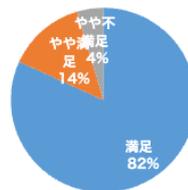


図8 園環境見学満足度（保護者）



図9 「魅力を語る」企画満足度（高校生）



図10 「魅力を語る」企画満足度（保護者）

大学生スタッフからのアンケートには、「高校生に対してどのような話をすれば、より幼児教育に興味をもってもらえるか、保育の魅力を感じてもらえるか考えることで、自分自身にとっても保育の魅力というのを改めて考える機会となった」「高校生のやる気に満ちた姿勢が刺激になった」「幼児教育についてや保育の仕事の面白さを改めて感じた」などの記述があり、幼児教育を学ぶモチベーションの高まりなど、こちらの想定外の場面で自身の成長に気づき職への期待が高まることもあった。

（8） 取組の課題

今年度、特別企画として行なった「魅力を語る」企画の内容や回数の検討を行う。尚、この企画の一部はYouTubeにて、動画配信している。予想以上の来場者数であったため、個別相談の時間と場所の確保、それに対応する大学生スタッフの増員も検討しなければならない。さらに、近隣の高校生や中学生へのより積極的な広報の仕方も検討する。

第7項 イメージ動画・パンフレット作成

イメージ動画作成については、第2項（職場訪問）に記載済みのため、本項ではパンフレット作成を中心に記載する。

（1） 取組内容

職の特徴をわかりやすく印象的にデザインしたビジュアルスティックなパンフレットの作成を行う。作成過程に大学教員とデザイナー、学生が協働で関わることで、子どもや幼児教育、職の魅力について声を交換しながら創り出す試みとする。

（2） 対象

作成者は（4）に記載。想定されるパンフレット読者は、大学生、高校生、中学生、現職者（OBOGの勤務園、当該事業協力園）、教員養成・保育者養成大学教員である。

（3） 取組のポイント

・幼児教育に直接関与していないデザイナーと協働で作成することで、広く社会に普及していける印象的なデザインや訴求的要素を盛り込む。

・幼児教育・保育職の特徴を整理するため、編集委員会を半年に亘り、複数回開催する。当事業で得られた知見やデータをもとに、職の特徴や魅力を整理する。

・パンフレット内容企画として、「職の魅力100voice」を当事業にかかわる者だけでなく、広く集める。大学生、中学生、高校生、保護者、現職者、大学教員の声として整理し、掲載する。（紙面上のEchoモデル提案）

・パンフレットには、イメージが洗練される写真を選ぶと共に、効果的に配置する。

【発信物（パンフレット・動画作成）全体を通して】

・想定読者の選定：当初、読者を高校生（中学生）に焦点化して考えていたが、これまでの発信物との重なりや当事業での成果との整合性、イメージ動画など他の発信物とのバランスを考え、パンフレット想定読者層を現職者や養成大学教員などにまで広げる。

・想定読者層が広がった関係で、パンフレット内の文章量が多くなったため、見出しやキャッチフレーズを活用し、さっと眺めたい（読みたい）読者には見出しを追うだけでも内容が伝わるようにし、深く読み込みたい読者には読者の思考が深まるよう編集する。

・発信物全体のイメージには統一感をもたせすぎないよう工夫した。その理由として、企業広告ではなく、大学が発信することの意義を考え、職の多様な魅力が発信される「Echo

モデル」を目指したためである。特に、イメージ動画作成では、学生目線で切り取る等身大の職イメージを動画作成に反映させ、そのまま伝えることで、同世代の中高生をはじめ、広く社会に発信できると考えた。そのことは、受け手にとって、多面的な職のイメージ形成へとつながり、発信物のテイスト（例えば、シンプルなもの、じっくりと味わうもの、直接的に感覚に訴えるものなど）も多様である方が、より幅広い読者へと届きやすいと考えた。

（４） 実施体制

・編集委員会：大学教員 1 名、大学 4 年生 1 名、附属教員 1 名、デザイナー 1 名、外部有識者 1 名

（５） 実施報告

- ・編集委員会 2024 年 8 月～2025 年 1 月までの期間で計 8 回（うち 2 回はオンライン）
- ・1 月 20 日入稿／1 月 29 日納品／2 月 1 日配布

（６） 効果検証の手法

作成者への聞き取り

（７） 取組の成果

パンフレット作成に携わった大学生からは、「原稿を読んでいて心が温かくなり、私自身も保育の魅力に改めて気づかされました。多くの人に読んでもらって、表面上だけではない保育の魅力が伝わったらいいなと思いました」との感想があった。パンフレット内容企画として、当事業にかかわる者だけでなく、大学教員がかかわる複数の研修会の参加者など（現職者）からも職の魅力を集めた。大学生、中学生、高校生、保護者、現職者、大学教員、さまざまな立場の者が、この事業に直接関与しないものも含めて、幼児教育・保育の職の魅力を立ち止まって考える機会となり、「200もある魅力」として整理し載せる

ことができた。(誌面上での“こだま”モデルの一例として発信)



幼児教育職の魅力の声（パンフレットより）

(8) 取組の課題

パンフレット完成・送付が1月末であったため、まだ読者反応は得られていない。来年度のオープンキャンパス来場者等に配布する予定となっており、それらを含めて、今後検証していくことが課題である。動画作成、パンフレット作成ともに、個人情報の扱いが厳しく、発信までに時間や手間がかかることが多かった。乳幼児期の子どもを対象とする分野特性から致し方ないと思うが、園によってもその捉え方がまちまちであり、迅速に、また効果的に発信していくには足枷となってしまう部分もあると考えられた。

第3章 事業全体のまとめ

第1項 実施状況

(1) 全体スケジュール

事業全体の実施スケジュールを図11に示した。概ね計画当初の予定通り進行した。取組全体を外部に向けて発信することを狙いとするパンフレットやイメージ動画の作成については、写真や動画等の素材収集や掲載にあたる倫理的手続等に時間を要した。

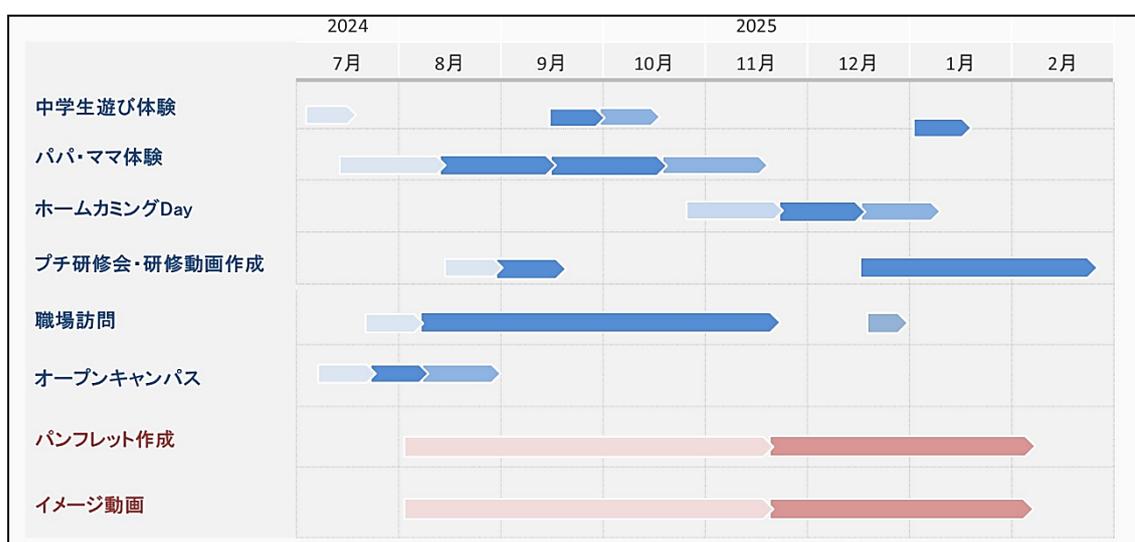


図11 実施スケジュール

(2) 参加者

事業全体の参加者数は計701名であった。取組毎の参加者数は図12の通りである。大学のイベントであるオープンキャンパス（図12の参加者数は幼児教育コースへの参加者のみ）、中学生の遊び体験授業は100名以上の大人数による取組みとなった。その他の取組みでは、本学幼児教育コースの学生の学びや卒業生のサポートなどを趣旨に含んだ、継続的または主体的に関わる取組であり、大学教員による個別対応が要したため、30名以下の少数の参加となった。

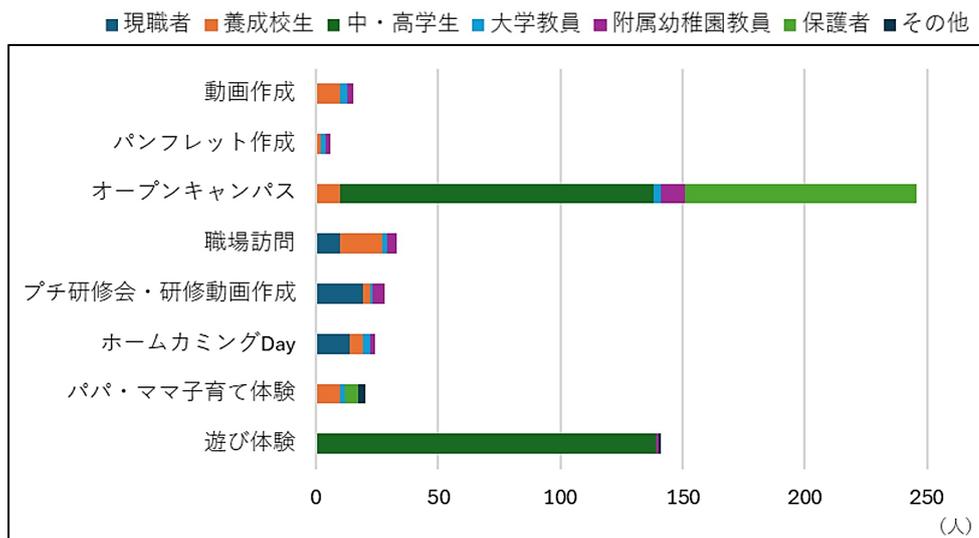


図 12 取組毎の参加者数

第 2 項 事業全体の成果と今後の課題

(1) より大学生のニーズとマッチした取組みへ

魅力的に働く保育の職場訪問における大学生への効果として、「職への理解や期待」「子どもの魅力の実感」「いろいろな実践の面白さを感じる」ことには一定の成果があった。他方、「自らのキャリア選択に影響があった」「幼児教育職のイメージに変化があった」の 2 項目に関しては、比較的効果が薄かった。また、ホームカミング Day の大学生（3 年生）への効果として、職への理解や期待の深まりから、キャリア選択が自分事となる大学 3 年生が働くことを具体的にイメージできたこと、仕事と生活とのバランスなど、学生が聞きたい情報に触れられたことで、幼児教育・保育職への前向きな捉えへとつながった。一方で、こちらも、「自らのキャリア選択に影響があった」「幼児教育職のイメージに変化があった」では、評価にばらつきが出た。この結果をふまえて、取組による対象の選定見直しや取組内容の焦点化で検証していく必要がある。ただし、キャリアやイメージは即効的につくられるものではないため、効果検証の手法や期間の検討も必要である。

また、オープンキャンパスの手伝いなどで、幼児教育・保育を学ぶモチベーションの高まりなど、想定外の場面で自身の成長に気づき職への期待が高まることがあった。大学教員としては、イベントや交流企画など学生の声を期待する一方で、学生は大学主催のイベントにおいて「学生の自主性や主体性の尊重」より「教員のサポートの充実」を求めている。

り、今後、両者のバランスとそれによる意識の変化を丁寧に進めながら、より学生のニーズとマッチしたキャリア支援を継続していく必要がある。

本学の特徴として、少人数制のため大学生を巻き込んだ取組みがしやすい特徴があり、今回の様々な取組において、学生を巻き込み、学生の声や力を発揮できるよう進めてきた。他方、本学は全国から学生が集まってくるため、特に地方に戻った場合、卒業後のつながりがもちにくい。そうした現職キャリア支援を包括的に進めるための地方大学等との連携も視野に入れて今後の支援のあり方を検討していきたい。

(2) 中高生対象の体験の効果と職の魅力との接点

中学生の遊び体験授業では、半数以上(73名)が「自分の幼少期を振り返る」と回答し、肯定的記述が多いことから、幼児や幼児教育職へのイメージUPにつながった。授業実施にすることで、裾野を広げ、より多くの生徒に興味関心の芽生えが示された。一方、授業時数の規定により、幼稚園の生活時間と合わせての授業枠の確保が難しいという課題も見出された。さらに連携校を広げていくためにも、交流に関心のある生徒／幼児と、もちにくい生徒／幼児、どちらにも意味ある交流計画が必要である。

オープンキャンパスは、満足度が高く、特に、附属教員が「魅力を語る」特別企画、個別相談、園環境見学の満足度が高かった。「話がわかりやすい・面白い」「幼児教育職の魅力(やりがいと楽しさ)を十分に感じた」「実際の先生の話の聞けることの貴重さ」「やっぱり幼児教育職に就きたい思いが強くなった」との声があり、魅力を語る企画や大学教員・現職者・大学生との直接的な対話や実際の園環境に触れる機会が魅力を感じる部分に影響したと考えられる。

大学生対象の子育て家庭訪問も引き続き実施する予定(授業・実習外の体験保障)であるが、地域の高校と連携し、高校生対象でも家庭訪問が行えるよう計画を進めている。

これらの体験の効果を引き続き、検証していくとともに、より幅広い層が幼児教育・保育と接点をもつことのできる取組みを検討していきたい。

(3) 開催すれば満足度が高い現職キャリア支援

プチ研修会参加者の満足度は高く、「普段の研修では話題にならないテーマを聞いて良かった」「自分を肯定してもらえた気分」など就業継続のモチベーションに効果があった。また、「自身が実習で学んで教員を目指した」「実習指導を手探りでやっている」「自分の経

験しもなく指導が難しい」という意見を受けて、「実習指導」をテーマとする動画を作成した。ただ、視聴の効果測定まで至らず、研修会等で活用しながら検証していく必要がある。また、ホームカミング Day での現職者の満足は高く、「卒業生だが、先輩の仕事やライフプランの話を聞いてよかった」「大学に行く機会がなく、企画があると思ってみようかなと思える」と現職者の期待に応えられる取組となった。魅力的に働く保育の職場訪問では、「自分の今を振り返る機会となった」「学生が作成した動画を見て率直に嬉しいし、さらなるやりがいや前向きな気持ちにつながる」と現職者から大きな反響があった。このように、開催すれば満足度が高い現職キャリア支援となることが明らかになった。

本学は、附属園実習を契機に学生と附属教員のつながりが深い。また、少人数制のため学生時代に形成されるつながりも強く、同窓会組織の活動も活発で、卒業後もつながりを活かした支援ができる環境にある。それでもこぼれ落ちてしまう人もいるため、様々なホームカミングの機会、学び直しの機会が各々にとっての選択肢となるよう、同窓会組織、ゼミ、コース単位等、引き続き複層的に展開していく。また、研修会や研修動画の活用において、同窓以外の現職者へも対象を広げていきたい。

(「職」の魅力向上と人材確保の好循環を生み出すモデル創出事業)

「魅力がこだまする幼児教育・保育職 Echo モデルの開発」

【事業実施者】

●平野麻衣子 (代表) 東京学芸大学 幼児教育教室

◎山崎寛恵 (副代表) 東京学芸大学 幼児教育教室

吉田伊津美 東京学芸大学 幼児教育教室

水崎誠 (2024年6月～8月まで) 東京学芸大学 幼児教育教室

◎八木亜弥子 (副代表) 東京学芸大学 附属幼稚園 (竹早園舎)

町田理恵 東京学芸大学 附属幼稚園 (竹早園舎)

阿部かほり 東京学芸大学 附属幼稚園 (竹早園舎)

山田有希子 東京学芸大学 附属幼稚園 (小金井園舎)

山崎奈美 東京学芸大学 附属幼稚園 (小金井園舎)

菅綾 東京学芸大学 附属幼稚園 (小金井園舎)

田島賢治 東京学芸大学 附属幼稚園 (小金井園舎)

西川由佳 東京学芸大学 附属幼稚園 (小金井園舎)

菅原こはる 東京学芸大学 附属幼稚園 (小金井園舎)

井口恵美 東京学芸大学 附属幼稚園 (小金井園舎)

中村陽子 東京学芸大学 附属幼稚園 (小金井園舎)

刑部幸優多 東京学芸大学 EXPLAYGROUND「子育てラボ」代表

「魅力がこだまする幼児教育・保育職 Echo モデルの開発」事業成果報告書

2025 (令和7) 年2月20日発行

国立大学法人 東京学芸大学 幼児教育教室・東京学芸大学附属幼稚園

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

TEL: 042 (329) 7382 Mail: hiranoma@u-gakugei.ac.jp 代表者: 平野麻衣子